

2018 年度

地域活性化に向けた海洋センターの新たな活用
に関する調査報告書

はじめに

B&G 財団では、1976 年から 2000 年まで地方自治体の要請に基づき、海洋性スポーツ・レクリエーションを通じた青少年の健全育成施設として、艇庫・プール・体育館からなる B&G 海洋センターを建設し、地元自治体に無償で譲渡した。施設建設と並行し、各施設で事業を計画・実施し、現場指導を行うことのできる指導者を養成し、資格登録者は 1 万 9 千人を超えている。

全国 389 自治体にある 470 ヲ所の海洋センターでは、水辺の体験活動やスポーツを通じた青少年の健全育成に取り組むとともに、地域住民のスポーツ活動や健康づくりなどの事業を実施。近年では、合唱サークルなどの文化活動や子育て広場などスポーツ以外での活用も広がり、地域コミュニティの拠点としての機能も有するようになってきている。

一方、地域を取り巻く環境は大きく変化している。とりわけ中山間地域では人口減少や少子高齢化、それらに起因する地域課題は多様化・深刻化し、地域住民の生活が維持されなくなることで、地域としても維持していくことが難しくなっている地域も見られるようになった。また、地域から若い人が流出することによって地域の活気が失われ、人口減少にさらに拍車がかかることも考えられる。

このような中、当財団では 2014 年度に青少年の健全育成推進計画を策定。海洋センター施設、指導者のノウハウ、全国の B&G ネットワークの活用などを通じて、コミュニティの再生や地域活性化に貢献する事業の創出に着手することとした。

本調査研究事業では、運動やスポーツに留まらない海洋センターの多様な活用の可能性、中高齢者層が海洋センターの利用に留まらず青少年対象事業への参画について、パイロット事業の実施等を通じ調査を行った。

1. パイロット事業実績

2018年度に実施したパイロット事業は以下のとおり。

1. 海洋センターを活用したオリンピック・パラリンピック巡回写真展
2. 高齢者の社会貢献活動を活用した海洋センター事業の推進

1. 海洋センターを活用したオリンピック・パラリンピック巡回写真展

2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、B&Gにゆかりのあるアスリート等の写真等を展示する巡回写真展（および関連事業）を実施することで、地域において、オリンピックやパラリンピック、スポーツやパラスポーツへの興味・関心を高めるとともに、障害者に対する理解を深め、インクルーシブな取組みを促進する。

- ①時期：2018年7月～2019年3月
- ②場所：海洋センター22カ所
- ③来場者数：36,123人
- ④内容：オリンピック・パラリンピックの写真展、パラスポーツ体験事業等

No.	都道府県	海洋センター名	展示日数	利用者人数	同時開催事業
1	兵庫県	上郡町	10	3,740	オリ・パラ紙芝居、柔道大会
2	秋田県	由利本荘市西目	11	904	アクアビクス教室、小学生水泳教室
3	福岡県	築上町築城	9	121	障害者マリンスポーツ体験教室・知的障がい者水泳教室・親子水泳教室・カヌー教室
4	福井県	坂井市丸岡・春江	5	4,582	水泳教室（丸岡）・運動遊び（春江）
5	三重県	大台町	11	125	荒天のため中止
6	熊本県	長洲町	8	1,584	にこにこフェスタ（ウォークラリー、トランポリン、パルクール、ボルダリング、ビンゴ、骨密度測定、健康相談会等）
7	山口県	周防大島町	5	819	バレーボール大会・シットイングバレーボール体験
8	宮城県	蔵王町	7	718	荒天のため中止
9	北海道	古平町	8	962	第43回古平ロードレース大会
10	広島県	三原市久井	6	227	B&Gチャレンジ「世界記録達成記念！誰でも世界記録にチャレンジ」
11	群馬県	みなかみ町新治	9	329	クライミング体験会
12	三重県	菰野町	6	896	障がい者スポーツの体験（SSピンポン、ボッチャ、フライングディスク、車いすスラローム、ゴールボール等）
13	埼玉県	久喜市栗橋	5	10,294	やさしさときめき祭り・赤花そばまつり・ボルダリング体験出展
14	熊本県	玉名市岱明	9	1,271	「パラスポーツチャレンジin岱明B&G」
15	埼玉県	嵐山町	10	653	第36回嵐山町健康マラソン大会
16	島根県	松江市宍道	8	1,386	荒天のため中止
17	千葉県	大多喜町	9	307	新春軽スポーツ体験会
18	兵庫県	芦屋市	10	2,789	障がい者とのスポーツ交流ひろば
19	愛媛県	愛南町御荘	11	1,383	第14回 愛南町ふれあい健康マラソン大会
20	岐阜県	八百津町	9	142	第20回B&G杯家庭婦人バレーボール大会
21	栃木県	下野市国分寺	7	1,407	障がいのある方も楽しめるやさしいスポーツ教室
22	島根県	雲南市加茂	14	1,484	パラスポーツ体験会
合計			187	36,123	



写真展（島根県雲南市）



写真展（熊本県長洲町）



同時開催事業（島根県雲南市）



同時開催事業（玉名市岱明）



同時開催事業（山口県周防大島町）



同時開催事業（埼玉県嵐山町）



同時開催事業（兵庫県上郡町）



記者発表（日本財団ビル）

(1) 写真展来場者の年齢構成

年齢構成	割合
未就学児(0～6歳児)	6%
小・中・高校生(7～18歳)	34%
19～29歳	7%
30代	8%
40代	10%
50代	8%
60代	14%
70歳以上	13%
合計	100%

年齢構成の幅が大きいこともあるが、小中高生が最も多い34%であった。
次の表から読み取れるが、写真展以外の海洋センター利用に併せて、写真展に来場することが多かったと推察する。

(2) 写真展の来場目的と海洋センター利用

- ・写真展の来場目的について、写真展を目的としているか、他の海洋センター利用に併せて来場したかを比較した割合

No.	都道府県	海洋センター名	写真展目的	利用ついでに観覧
1	兵庫県	上郡町	12.5%	87.5%
2	秋田県	由利本荘市西目	4.6%	95.4%
3	福岡県	築上町築城	58.8%	41.2%
4	福井県	坂井市丸岡・春江	0.0%	100.0%
5	三重県	大台町	25.0%	75.0%
6	熊本県	長洲町	0.5%	99.5%
7	山口県	周防大島町	19.5%	80.5%
8	宮城県	蔵王町	17.2%	82.8%
9	北海道	古平町	2.7%	97.3%
10	広島県	三原市久井	34.6%	65.4%
11	群馬県	みなかみ町新治	25.7%	74.3%
12	三重県	菰野町	0.0%	100.0%
13	埼玉県	久喜市栗橋	13.0%	87.0%
14	熊本県	玉名市岱明	6.3%	93.7%
15	埼玉県	嵐山町	1.9%	98.1%
16	島根県	松江市宍道	5.1%	94.9%
17	千葉県	大多喜町	11.1%	88.9%
18	兵庫県	芦屋市	14.0%	86.0%
19	愛媛県	愛南町御荘	1.2%	98.8%
20	岐阜県	八百津町	55.9%	44.1%
21	栃木県	下野市国分寺	15.4%	84.6%
22	島根県	雲南市加茂	8.7%	91.3%
平均			15.2%	84.8%

平均すると、15%対 85%と他の利用ついでに来場した割合が圧倒的に高いが、福岡県築上町や岐阜県八百津町は、約 50%対 50%となっている。

(3) 写真展来場者の初めて海洋センターを利用した割合

No.	都道府県	海洋センター名	海洋センターを初めて利用
1	兵庫県	上郡町	32.1%
2	秋田県	由利本荘市西目	2.5%
3	福岡県	築上町築城	29.0%
4	福井県	坂井市丸岡・春江	0.0%
5	三重県	大台町	28.8%
6	熊本県	長洲町	13.2%
7	山口県	周防大島町	25.7%
8	宮城県	蔵王町	3.4%
9	北海道	古平町	2.7%
10	広島県	三原市久井	8.2%
11	群馬県	みなかみ町新治	7.2%
12	三重県	菰野町	19.5%
13	埼玉県	久喜市栗橋	10.1%
14	熊本県	玉名市岱明	4.6%
15	埼玉県	嵐山町	1.5%
16	島根県	松江市宍道	7.3%
17	千葉県	大多喜町	2.6%
18	兵庫県	芦屋市	49.8%
19	愛媛県	愛南町御荘	4.3%
20	岐阜県	八百津町	25.0%
21	栃木県	下野市国分寺	8.9%
22	島根県	雲南市加茂	7.8%
平均			13.4%

平均すると、初めて海洋センター利用する割合は 13.4%であるが、兵庫県芦屋市はほぼ 5 割に達するなど、写真展が海洋センター利用につながる事例となり得ると推察できる。

(4) 来場者の感想

- ・ 自分も写真の様に強くなりたい (10代女子)
- ・ オリンピックを身近に感じた (30代女性)
- ・ 写真を通じてパラスポーツ競技にこんな種目もあったのかと驚いた。(20代男性)
- ・ パラスポーツの写真を初めてみた。(10代男子)
- ・ B&G財団の果たしてきた役割の大きさを感じた。(50代男性)

- ・パラリンピックで活躍している選手を知れてよかった（20代男性）
- ・懐かしい写真も多く、当時の事を思い出しながらスポーツの力を感じた（60代男性）
- ・活躍した選手の姿を思い出し、元気な気持ちになった。（40代女性）
- ・カッコいいスポーツ選手をみて、スポーツがやりたくなった。（10代女性）
- ・1964年の東京オリンピックが懐かしく感じる。障がい者スポーツも世間に認知されてきた感があり、2020でも活躍を期待する。（60代男性）
- ・自分もスポーツをしているが、メダルを取った姿はカッコいい。（11歳女子）
- ・B&Gにゆかりのある選手も沢山いる事を初めて知った（50代男性）
- ・メダルを日本にもたらしてくれたあの時の感動を思い出す。（60代女性）

(5) 成果

目標人数を大幅に上回る来場者（目標：10,300人⇒実績：36,123人）を得て、2019年度に事業化することができた。これは、東京オリンピック・パラリンピック開催の時宜を得ていることが、大きな要因と考えられる。事業実施により、多くの来場者があり「東京オリンピック・パラリンピック」の機運を高めることができたこと、パラスポーツ関連事業を同時開催することで、障害者スポーツの理解促進にもつながったことなど、海洋センターの新たな活用としても効果的な事業である。

(6) 課題

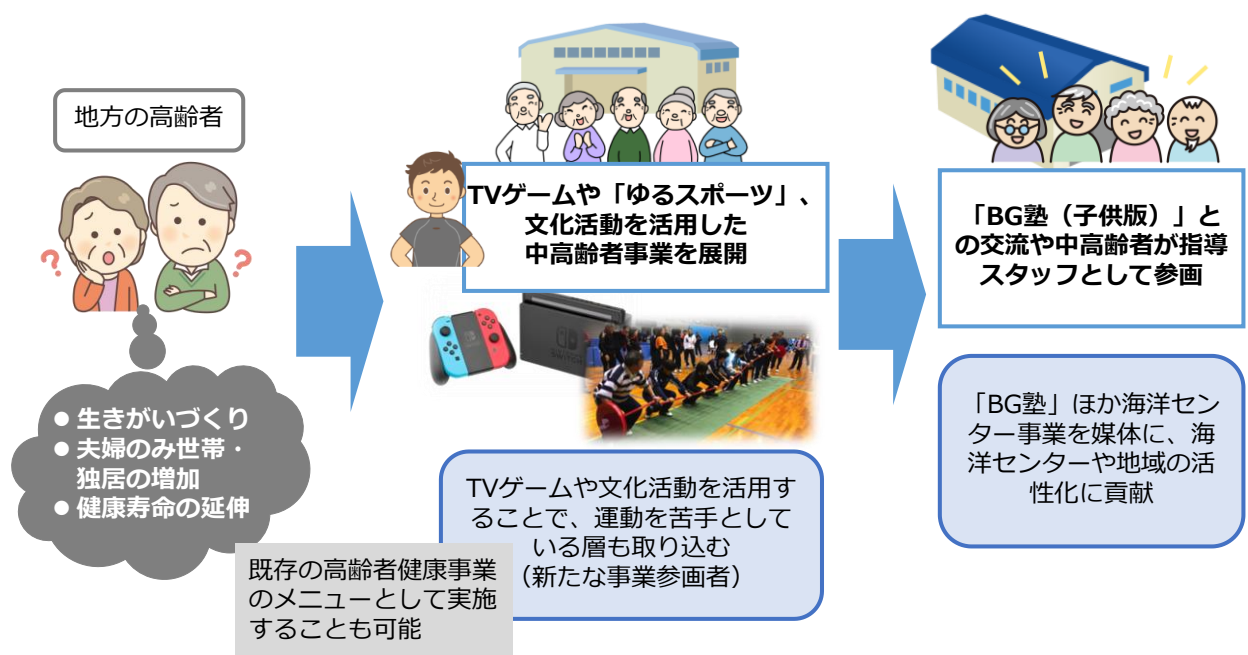
写真展を通じた障害者スポーツの理解は促進できたものの、同時開催事業のうち、障害者スポーツの体験等を実施した海洋センターは8センターに留まった。さらなる障害者スポーツの理解を深め、東京オリンピック・パラリンピックの機運を高めるためにも、次年度以降は、障害者スポーツ体験会等の開催を拡大する必要がある。

2. 高齢者の社会貢献活動を活用した海洋センター事業の推進

海洋センターにおける高齢者の居場所づくりとして、運動教室や文化教室等をパイロット実施し、居場所を利用する高齢者が「BG塾」ほか海洋センター事業の指導に携わるなど、運営者側として関わる方策・仕組みを見出す。

(1) 事業概要

中高齢者の居場所づくりを通じて、居場所を利用する高齢者が「BG塾」ほか海洋センター事業の指導に携わるなど、運営者側として関わる方策・仕組みを見出す。



(2) 成果・課題

- ・高齢者の居場所として、文化教室やTVゲームを活用した運動教室は有効であった。
- ・海洋センターを初めて利用した割合は4%だが、年に数回利用の割合は45%と、新規利用者開拓として、本教室は有効であった。
- ・参加者の外出機会は、買物や農作業、町内会活動で「週1~2回」の最も高く、「運動や散歩」はほとんどないとの回答が最も高いなど、本教室は外出機会を提供できるという点でも有効であった。
- ・アンケートでは、いま生きがいに感じることで「ボランティア活動」は4%に留まるが、今後やってみたいことで「ボランティア活動」は13%になる。一方で、個別のヒアリング調査では、地域や社会へ貢献活動に係ることの責任などの不安から、積極的になれない面も伺うことができた。

(3) 今後の方針（2020年度事業化を目指す）

- ・教室を定期開催（月に1回など）し、高齢者の居場所として定着させる。
- ・上記参加者（高齢者）が、「BG塾」など子供対象事業の運営に参画できるよう、登録制や研修、子供との交流事業などを試験実施し、高齢者が楽しみながら無理なく参画できる方策などを調査する。
- ・「第三の居場所」など、他事業への波及を検討する。

(4) 実施概要

①鳥取県鳥取市佐治海洋センター

実施日	2月1日（金）	2月17日（日）	3月20日（水）
参加者数	15人	30人	19人
内容	七宝焼き教室	ボッチャ教室	苔玉づくり・民話教室



②滋賀県米原市山東海洋センター

実施日	2月26日(火)	2月27日(水)
参加者数	11人	10人
内容	テレビゲームを活用した運動教室	テレビゲームを活用した運動教室



5. アンケート概要

①性別

行ラベル	個数	割合
女性	31	42%
男性	38	52%
回答なし	4	5%
総計	73	100%

②年代

行ラベル	個数	割合
30代	1	1%
50代	5	7%
60代	31	42%
70代	27	37%
80代	6	8%
90代	1	1%
回答なし	2	3%
総計	73	100%

③海洋センター利用頻度

行ラベル	個数	割合
ほぼ毎日	5	7%
週3~4回	13	18%
週1~2回	11	15%
月に数回	5	7%
年に数回	33	45%
初めて	3	4%
回答なし	3	4%
総計	73	100%

④海洋センターまでの交通手段

行ラベル	個数	割合
徒歩	12	16%
自転車	5	7%
自家用車(自運転)	47	64%
自家用車(送迎)	2	3%
バイク	1	1%
回答なし	6	8%
総計	73	100%

⑤外出頻度（買物）

行ラベル	個数	割合
ほぼ毎日	11	15%
週3～4回	17	23%
週1～2回	33	45%
ほとんどない	4	5%
回答なし	8	11%
総計	73	100%

⑥外出頻度（仕事）

行ラベル	個数	割合
ほぼ毎日	10	14%
週3～4回	11	15%
週1～2回	13	18%
ほとんどない	29	40%
回答なし	10	14%
総計	73	100%

⑦外出頻度（運動や散歩）

行ラベル	個数	割合
ほぼ毎日	18	25%
週3～4回	13	18%
週1～2回	14	19%
ほとんどない	21	29%
回答なし	7	10%
総計	73	100%

⑧外出頻度（農作業や町内会活動）

行ラベル	個数	割合
ほぼ毎日	12	16%
週3～4回	8	11%
週1～2回	32	44%
ほとんどない	14	19%
回答なし	7	10%
総計	73	100%

⑨いま、生きがいを感じること

行ラベル	個数	割合
仕事	20	10%
家事・育児	3	2%
趣味の活動	44	23%
学習や教養を高める活動	5	3%
健康づくりやスポーツ活動	31	16%
旅行	12	6%
家族とのだんらん	16	8%
町内会や老人クラブ活動	3	2%
テレビやラジオ	20	10%
ボランティア活動	7	4%
友人との食事・買物	27	14%
その他	3	2%
特になし	1	1%
総計	192	100%

⑩今後やってみたいこと

行ラベル	個数	割合
仕事	4	3%
家事・育児	4	3%
趣味の活動	13	9%
学習や教養を高める活動	27	19%
健康づくりやスポーツ活動	14	10%
旅行	39	27%
家族とのだんらん	1	1%
町内会や老人クラブ活動	11	8%
テレビやラジオ	4	3%
ボランティア活動	18	13%
友人との食事・買物	4	3%
その他	0	0%
特になし	4	3%
総計	143	100%

2. まとめ

運動やスポーツを通じた青少年の健全育成と住民の健康づくりを目的として建設された海洋センターは、周辺に文化・福祉・学校施設なども整備されているなど、建設時から社会環境も大きく変化し、一部の海洋センターでは、文化活動や学習支援活動、高齢者や障害児の居場所機能など、多様な方法で活用されている施設も見受けられるようになった。

今回の調査研究では、東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けた写真展や、高齢者の生きがいづくりなど、時代のニーズがあるとともに、地域の実態に合ったパイロット事業を実施することにより、海洋センターの新たな活用や自治体の活性化につながる新規事業開発の有用性を見出すことができた。

B&G財団の事業パートナーである海洋センター所在自治体は389市町村であり、全国1,718市町村の22.7%である。約1/4を占める海洋センター所在自治体では、全国平均と比べ人口規模が小さく、高齢化率も高い。人口減少や少子高齢化などの社会的課題は、いずれはすべての自治体が直面するものである。そのような意味においては、海洋センター自治体は社会課題の最先端自治体といえる。

「公共施設等総合管理計画」における海洋センターの方針に関する調査では、海洋センターを長期的に使用する自治体が85%を占めている。このような結果から今後は、海洋センターの利用を従来のスポーツや運動だけではなく、各種施策に合わせながら、地域特性を活かした多様性・多機能性のあるものへ変化させ、社会的課題に自治体とともに向き合う事業を展開していく。

B&G